さくらびと

松前の血脈桜

細川呉港（会員）

桜満開の函館公園の公園管理事務所の学芸員が、「桜なら、ぜひ松前城に」という。

松前は、北海道最南端。特急で函館から木古内（きこない）まで60分、さらにバスに乗り換えて1時間30分。往復で5時間はかかる。日帰りはちょっときつい距離である。

函館だってめったに来ないのだから、松前となるとおそらくこれからもなかなか行くチャンスはなかろうと思い、思い切って行くことにした。

松前城の桜は前から噂は聞いていた。折から早咲きの八重の桜が、枝もたわわに城中、咲いていた。ピンクの色も美しい。本土でもあまり見ない八重である。

この桜は「南殿（なでん）」といい、本土にも南殿という名前の桜があるが、同じかどうかわからないと。専門家が誰も、比較同定した人がいないのかもしれない。城の入り口からこの南殿の桜が一杯で、そこだけを見ると松前城は「南殿の城」のようにも思える（平安京の紫宸殿から続く京都御所の前にある「左近の桜」も南殿の桜という）。

松前城と桜と堀

この南殿の桜を城の中だけでなく、小さな城下町ではあったが松前のあちこちに植えたのが、鎌倉兼助であった。明治11年の生まれ。鎌倉家はもともと山形県の大工の棟梁であったが、松前城築城のとき先代が松前に来てそのまま居ついた。鎌倉兼助は私塾に通い、松城学校を卒業。もともとは教師志望であったという。卒業後松前郡の農会の指導員になり、明治41年福山町（後の松前町）の書記になった。つまり町の職員である。

兼助はちょうど明治41年、函館に行って函館公園の桜を見た。（以前に私が書いた函館公園の謂れにある）函館公園は多くの人たちの協力のもとに明治12年に完成しているから、それからほぼ30年、植えられた桜も大きく育っていたことだろう。函館公園は桜で満開だった。たくさんの人たちが見物に集まっていた。松前の田舎から来た兼助は賑やかな函館公園をうらやましく思った。そのころ松前

は、ニシンの水揚げが極端に少なくなり、不況を呈していた。また北海道の入り口であった松前港が、函館にとって替わられてから、もともとは城下町でありながら、人も少なくなり町は寂れる一方だった。なんとかしなくては――。

松前に帰った兼助は、その年から桜の接ぎ木を始めた。まず南殿であった。南殿というのは、松前にとっては馴染みある、またいわれのある桜であった。お城の地続きにある光善寺の境内に、大きな南殿の木があった。別名を『血脈桜（けちみゃくざくら）』という。

この血脈桜については町には古くから伝わる伝説があった。

昔々、といっても江戸時代のことであろう。この町に柳本伝八という鍛冶屋がいた。この鍛冶屋が18歳になる静枝という娘を連れて上方見物に行ったという。親が亡くなって高野山に行ったという説もあるからどちらが本当か分からない。そのとき吉野で知り合った尼さんが、静枝に桜の苗木をくれたという。

この苗木をはるばる松前まで持って帰った。当時のことである。上方から松前まで道中は大変だったと思われる。あるいは北前船で敦賀から日本海を北に行ったのかもしれない。

とにかくその苗木を上方から松前まで持って帰り、菩提寺であった光善寺に植えた。

苗木は光善寺で大きくなり、見事な桜を咲かせるようになった。月日は移り、それから60年くらいたった。その苗を植えた静枝も亡くなっていたという。宝暦年間というから9代将軍徳川家重の時代に、光善寺は本堂を建て替えることになり、この桜をどうしても切らなければならなくなったと――。

明日はいよいよ桜を切るという日の夜遅く、住職の穏誉上人の枕元にひとりの女性が現れて言うには、「私は明日にも死ぬ身の者です。どうか『血脈』を書いてください」。

驚いたのは穏誉上人、すでにもう床に入って寝るところだった。上人はもう眠いので明日にしてくれという。しかし女性はどうしても今夜でないと間に合わないというのだ。仕方なく上人は起き上がり、墨を磨って血脈を書いた。

血脈というのは本来、仏教で師から弟子へ仏法を正しく伝えることを師資相承というが、この師資相承の系譜、あるいは系図のことを血脈という。早い話が、お釈迦さまから次々に弟子に伝わる系図である。この系図を、本来は法職にない一般の人間にも、あの世に行って修行しなさいと言う意味で持たせるようになったのかもしれない。法然も死者を送るのにこの血脈を書いたという記録があるそうである。

この血脈の書き付けを、お葬式のとき掲げて、お経をあげ、骨と一緒に埋葬する。この地方では、お通夜のときにはすでにお骨になっていて、お葬式のときにこの血脈が必要なのだという。松前あたりだけの風習かどうかは知らない。現在の光善寺の住職、松浦真亨さんによると、本来の血脈が、だんだん転化して、この血脈をもって極楽に行くようにという死者のお守りのようになったとも。

私の実家は広島で、安芸門徒、浄土真宗だが、こうした話は聞いたことがない。真宗は亡くなったときから浄土に行くが、浄土宗は浄土に行ってから修行をすることになっているから、そういった風習が生まれたのかもしれない。

ついでに言うと、ずいぶん前の話だが、戦前、中国のお寺でも、死んだ人に、引導というか、その人の生涯を書いた履歴のようなものを渡すらしい。その書き付けを持って閻魔大王の前に行き、その人の生涯の生き方がよかったか悪かったか、査定を受けて、そこで天国に行くか、地

獄に行くか決めるのだという。

そこでお寺では、いちいちそれを死者が出るたびに全部書くのは面倒なので、履歴の各項目の枠を書いたものを、木版にしてあるものがある。つまり履歴書の紙が印刷されていると思えばいい。現在でいえば、小学校、中学校と学校名を入れる枠があり、また賞罰などを書き込む枠があるようなものだ。この古い木版を、私は昔中国の骨董屋から買ってきた覚えがある。

とにかく無理やり、血脈を書かされた光善寺の僧が、翌朝起きると不思議なことに、今日いよいよ伐採するという境内の桜の枝に、何やら白い書き付けが結ばれている。近づいてみると、それは紛れもない、自分が昨晩、枕元に現れた女性に書いてやった血脈そのものであった。住職は驚いた。

さては昨日、やってきた女性はこの桜の精だったのではないか（あるいはとっくの昔に亡くなった父親と上方に行った静枝の霊だという説もある）。とにかく桜の精は、自分が今日、切られるのを知っていて、それで前の晩に血脈をもらいに来た――。住職はそう考えて、なんとしてもこの木は切らないでおこうと決め、本堂の建て替えを諦め、代わりに山門を作ったそうである。今から３８０年くらい前の話で、この地方の伝説である。光善寺の現在の住職、松浦真亨さんの話だ。

これが現在光善寺にある、見事な桜である。人々はいつのころからかこの桜を血脈桜と呼ぶようになったという。

私が今回訪ねたときちょうどこの血脈桜が満開であった。高さはそれほど高くないが、花を一杯につけた枝の広がりが見事な桜である。

松前のすべての「南殿」の原木、光善寺の「血脈桜」。浅利政俊先生が、根を掘り起こしたりして保存、再生を手掛けている

さて、話をもとに戻すと、明治41年に松前町の役場に勤めるようになった鎌倉兼助が、函館公園の桜を見た後、松前の復興を願って桜を増やそうとしたとき、この見事な花を咲かせるピンクの八重の血脈桜の枝をとって、挿し木にしたのは当然であった。台木はソメイヨシノである。

兼助はもくもくと接ぎ木をして、松前に桜を増やしていった。接ぎ木するだけでなく、新しく桜を植えるところを掘り起こし、また土を入れなければならないが、お城に続く今は松前公園と呼ばれている地域は広大な面積で、もともとは笹藪だったりしてこれも掘り起こすのは大変だったという。そのうち兼助は町の収入役になり４期勤め、さらに助役になって１期勤めた。勤務をしながらの桜の苗木づくりである。さまざまな種類の苗木を挿し木した。北海道にもともとあるオオヤマザクラのほか、関山、普賢象、それにソメイヨシノといったニワザクラも植えていった。私はこれまでにも多くの明治生まれの人々の話を聞いていたが、明治生まれの男の執念はすごい。けっして高学歴ではないが、何かをしようという一念を持ち続けることにおいては、その後の人たちが見習わなければいけない

ことがたくさんある。

城内の入り口にあるひときわ大きなソメイヨシノは、現在、桜前線の北海道上陸の基準となる「標本木」となっている。桜はもともと日本に自生している桜（原生種）以外に、自然交配、あるいは人工的に交配された園芸種も多く、花の立派な八重の桜はみなそうである。これらを総称して「里桜」という。オオシマザクラと掛け合わされた桜が多い。したがって、咲く時期はまちまち。全国の桜の名所はそのほとんどがソメイヨシノだが、この松前ではたくさんの種類の桜が植わっている。とくに後に鎌倉兼助のあとを継いで、松前の桜を増やしたのは浅利政俊である。私の書いた前文「北に帰った人たちの残していったもの」（「善隣」２０１９年12月号）でも紹介したが、浅利先生については後述する。とにかく、松前の桜は種類が多く、「早咲き、中咲き、遅咲き」とあって、それぞれ咲く時期が違うから、それに合わせて見に行かなければならない。逆に言えば、４月下旬から５月中旬まで、いつ行っても桜が見れるというわけである。現在松前には、２５０種、１万本近くの桜があるというからそのうちどれを見に行くかを決めなければならない。

松前城。右に鎌倉兼助翁（明治11年生まれ）の顕彰碑が建っている。大正から昭和にかけ、町の助役などを歴任し、50年にわたり「南殿」の桜を城や、町中に植えた。「桜の松前」の基礎を作った人

「早咲き」には、南殿、染井吉野、白雪姫。「中咲き」には、糸括（イトククリ）、雨宿（アマヤドリ）、松月（ショウゲツ）。「遅咲き」には、普賢象（フゲンゾウ）、松前白雪、関山（カンザン）などがある。見物客は、昨年は「早咲き」を見たから、今年は「中咲き」を見に行こう、という言い方をする。見方によっては１か月半の間に３度見に行く必要があろう。

鎌倉兼助に続いて松前に桜を増やしたのは、浅利政俊である。子どものころは函館の北、七飯（ななえ）町にいた。昭和６年（１９３１）生まれ。小学校時代の朝鮮の青年との話はすでに述べたとおりだ。

浅利家はもともと祖父の時代に醤油の醸造業を生業にしていて、おそらく裕福な家だったのであろう。ところがあるとき火事があり、すべて焼けてしまった。そのとき馬も３頭亡くなってしまったという。

今なら火災保険や会社更生法があるが、当時は丸焼けになったらそれでおしまい。浅利家はあっと言う間に没落する。当時、火事がいかに恐ろしいかが分かる。それで昔はどの家も、火伏せの神様を、台所に貼っていたのだろう。それからの浅利家は田んぼがなかったため貧乏だったと――。

浅利家は、祖父の時代に立派な庭を持っていた。その庭になんと関山と泰山府君（タイザンフクン）という桜があったという。とくに関山は直径40センチにもなる大きなものだった。その時代に、北海道の田舎にこうした里桜（園芸種）があったのは極めて珍しいと思われる。政俊少年はすでにそのころから桜の洗礼を受けていたのだ。それに母親が、兄と

政俊に畳一枚ほどの畑を与え、ここで自分の好きな花を植えて育てなさいと――。そこで政俊は畑に、矢車草やサクラソウ、それに水仙などを植えた。また馬糞を集めてきては畑に入れたとも。子どものころから百姓仕事が身についていたのだ。

昭和20年、14歳で終戦。その後地元の大野農業高校へ。さらに函館にあった北海道第二師範学校へ進み、理科の教員になるつもりだった。ところがもともと弱かった心臓に加え、胸の疾患も加わって2年間、休学を余儀なくされる。その間に学校は、北海道学芸大学函館分校に改編。政俊はそこに復学して当時79歳の植物学者、菅原繁蔵先生に会う。この先生が浅利をして、将来、桜の道に進むことになる大きなアドバイスをくれることになる。

菅原繁蔵（明治9年生まれ）は、根っからの植物研究家。独学で小学校教員の免許をとり、生涯植物採集をした名誉欲のない人で、膨大な植物標本を後世に残した。樺太の植物採取をも行い『樺太植物誌』を表す。

その大先生が政俊の学校で植物分類学を教えたのだ。菅原先生は政俊にさまざまな啓示を与えた。「常に自分の足で自然の謎解きをすること――」などなど。

政俊が卒業して松前の小学校に新卒として就任するとき、菅原先生は有名な桜学者、三好学の『桜花図譜』という立派な桜図鑑を2冊貸してくれた。「じっくり腰を据えて桜を研究しなさいと」。後にそれは政俊のものとなるのだが、いまでもその本は政俊の宝である。浅利先生にとって菅原繁蔵は生涯桜の研究をする上での、指針になった人だ。

何かをなした人には必ず、その人に啓示を与えた人がいるものである。浅利政俊と恩師、菅原繁蔵もそういった関係の師弟である。

昭和28年（1953）、浅利は松前の清部小学校、松城小学校と勤務するが、町で「桜見本園」をつくり、火事で消失した松前城に桜を植え、復興の象徴にしようという話が起こる。桜による町おこしである。浅利は農業改良普及員の田中淳さんと一緒に桜見本園を作る計画を練った。

浅利は全国各地からいろいろな種類の桜を集め、桜はどんどん増えていった。そのうちの1つが、静岡県三島の国立遺伝学研究所の竹中要である。

竹中要博士は遺伝学会の大御所で、昭和30年代から40年代にかけて、細胞遺伝学の研究素材にたくさんの桜を集め、3万坪といわれる遺伝学研究所の周囲には255種の桜を植えた。いまでも健在である。私も4度ほど行ったが、遺伝研では、三島市と協力して年に1日だけ、園内を一般に開放している。あまりにもたくさんの種類があるのでとても一度には覚えられないくらい、見事なものである。とくに竹中はソメイヨシノの起原の解明の研究を行った。さまざまな形で、ソメイヨシノとエドヒガンの交配をし、形態的な特性の観察を行った。それは現在行われているゲノム分析技術をもちいた遺伝子レベルの確認と大差ないくらい正確だった。またソメイヨシノの実生から、吉祥寺、咲耶姫（サクヤヒメ）、染井匂、修善寺桜、三島桜、衣通姫（ソトオリヒメ）、などの品種をつくった。なかでも有名なのは天城吉野である。

浅利政俊は竹中要からさまざまな指導を受け、桜の苗を分けてもらった。そして松前の桜見本園に植えた。竹中は、字のごとく竹を割ったような性格で、結構、気性の激しい人だったが、人情味のある人だったという。

掛け合わせによる品種改良は、1代目は必ず優性な形質が出てくること。萼頭や葉柄、あるいは葉っぱに毛があるとか、

浅利は後に自分でやってみて、何が優性なのか、何が劣性なのかを自分で確かめた。

よく知られるソメイヨシノは、オオシマザクラとエドヒガンの交配種だが、現在のＤＮＡの検査によると、エドヒガン50パーセント、オオシマザクラ30パーセント、ヤマザクラ10パーセント、その他10パーセントという数字がでているそうである。

桜の苗木は、大阪の造幣局からも貰った。有名な、西の桜守、笹部新太郎の植えた桜である。笹部は生まれたときから大きな財産を引き継ぎ、生涯あまり働くことなく、桜の増殖一筋、多くの桜の苗木をたくさんの人に配ったのだけれど、それだけに、桜に対する思いも深く、独自の思想を持っていた。拙著『桜旅』のところでも書いたが、笹部の残した言葉の中で一番すばらしいものは次のようである。

「おおよそ桜を愛でる人の心は、数字では表せられない。桜を愛でない人は、愛でる人の気持ちはまったく分からない（河津桜祭が１年目は来客が３千人だったものが、８年目に百万人に達したといえば、すぐに反応する人も、花を愛する人の気持ちの深さは理解できないのだ）。ものを判断する上で、数字を使うのは便利だけれど、物差しで計れないものには効果はない。物差しに替わるものは、広くもののよさを識る訓練の集積である『人』である。『人の教養』である。これを得るためには、絵画といわず、音楽といわず、建築といわず、（焼き物といわず）およそ、ものの良さを認められるものへの観察を続けなくてはならない。それによって磨き上げられた身についた『タシナミ』というもののみが、ものの優劣を決めることができる」と。

けだし、名言である。ものの価値は量ではなく質である。唯物史観の対局にあるものだろう。

笹部は、明治20年生まれ、昭和53年に91歳で亡くなっているが、浅利政俊は、笹部との生前での面会は叶わなかったという。

浅利はまた、小学校に赴任した昭和53年から光善寺の血脈桜の面倒を見ている。江戸時代から明治36年まで３度の大火に見舞われた寺は、そのときの焼け焦げが血脈桜に残っていたという。堆肥を施し、また花見客が桜の根本に近寄らないように防護柵を作ったりした。その後たびたび、根頭がんしゅ病、コスカシバ発生、幹の空洞化、胴枯病などさまざまな問題が起こった。それらにひとつひとつ向き合いながら、一から勉強して対処していった。

昭和61年（１９８６）からは、幹の上から「不定根」を地上に誘導し、木そのものの再生をはかったり、また根のまわりの土を活性化するために、落ち葉を敷き、さらにその上から松前城の瓦を伏せて並べ、腐葉土をつくりミミズの発生を促して、ミミズによって土壌を耕したりした。そうしないと、シャベルで土を耕すと、根を切ってしまうからである。また観光客が押し寄せても、根のまわりを直接押さえつけないような板張りの廊下も作った。もちろんひとりではないが、みんな浅利自らシャベルを持ってやったのである。

今年（２０２０年）は、浅利が血脈桜を見守って69年になる。人間の一生に及ぶ時間である。２０１７年に私が見た満開の血脈桜も、本当に元気よく、枝を四方に伸ばし、まわりを囲った柵を越えんばかりに枝を伸ばしていた。

浅利のやった仕事はそれだけではない。

松前城の中の「桜見本園」のために全国から桜を集める一方、彼は教え子の小学校の児童たちと桜の実を拾ったのである。

八重咲きなどのような多くの里桜は、基本的にはほとんど実を結ばない。花はたくさん咲いても、1本の木に、ほんの数個しか実がならない場合も多い。彼は小学生たちと一緒に、この実を採り、あるいは拾ったのである。長い竹竿の先端をふたつに割り、サクランボを挟んで採った。

「種を蒔いて、桜を増やそう――」百姓仕事を子どものときからやってきた浅利が当然のごとく考えた方法である。しかし実生から育てると芽が出て、苗が育ち、大きくなって花を咲かせるようになるには10年はかかる。気の長い話だ。しかし、浅利は子どもたちとこれを繰り返したのである。しかも蒔いた種が全部芽を出すとは限らない。全部で千粒蒔いて、数十個というときもあった。

すでにご存じの方も多いと思うが、桜は「自家受精」をしないのである。自分の木の花の雄蕊が、雌蕊についても授精しない、実がならないのである。だから1本の木に、たとえ何個であっても、実がなったということは、それは他の桜の木の花粉がついて授精し、実がなったということなのだ。したがって、実を植えると、それは親そのものの木と同じではない。他の桜の木との交配によってできた子どもなのだ。つまり混血児、雑種ということになる。つまり新しい桜だ。このようにして松前の桜畑には新種の桜がたくさん生まれた。その数ざっと百種もある。

浅利は10年以上かけて、新しい桜の形質を見極め、新種の名前をつけた。とくに一般的には実がならない南殿のような八重の桜の実生からできた桜はいいものがあった。このようにしてできた最初の桜が、昭和34年の「綾錦（アヤニシキ）」である。南殿の実生から生まれたものだ。蕾は紅色、開花すると内側は薄い紅色、外は紅色である。花の直径は5センチは越す。八重咲きで花弁は20枚から25枚ある。みごとな桜だ。また松前の毬山紅八重桜の実生からできた「琴糸桜」（昭和34年）。同じく松前の法幢寺にあった名前の分からない八重桜の実生からできた「幸福」（昭和35年）などなど。浅利はまた、さまざまな掛け合わせも試みた。「染井吉野」と「大山桜」を掛け合わせた「照桜」（昭和35年）。「日暮」と「福禄寿」の掛け合わせから選抜した「花染衣」（昭和36年）。「白雪姫」は「染井吉野」と「南殿」の交配（昭和36年）。「静香」は「天の川」と「雨宿」の交配（昭和37年）。「花笠」は福禄寿の実生から選抜したもの（昭和38年）。「紅華」は「糸括」と里桜の交配（昭和40年）など。

昭和30年代から40年代末にかけて、浅利は次々に松前から新品種を発表している。全部で百種を越えた。

浅利政俊はこのようにしてさまざまな仕事をしてきたが、私が思うには、彼がやった仕事の中で一番すばらしいと思うのは、最初は小学生の動員。桜の木の下で、みんなで実を捜し、種をまいて芽が出た苗を育てる。水をまく。そうすることで、子どもたちが、小さいときから桜に、あるいは植物に関心を示すようになったこと。また、その子どもたちが大きくなっても、いつまでも自分たちの関わった桜に愛着を持ってくれている。そしてそのまた子どもにも、花や木を愛する気持ちを教えてくれていることである。不幸にして、こうした教育を受けなかった人は、桜の美しさも、植物の生命の尊さも知らないままに大人になり、ともすれば経済優先の価値観の中で、平気で木を切ったりするのだ。

今、全国の公園や名園の手入れを、きわめて安い値段で土建業者が落札している。誰でもが落札できるようになったことで、いままでやっていた庭園業者や、専門の庭師などが落札できないのだ。土建業者は、木の手入れは素人である。アルバイトを使う。そしてさらに「台風が来たとき倒木の心配がある」「木が大きくなりすぎると江戸の庭園の風景を壊す」などという名目で、大木を切って、中国やあるいは家具屋に高い値段で売っている。そういったことに地方の行政の公園や庭園の担当者はまったく気がつかないばかりか、関心を示さない者が大勢いるということである。悪事、千里を走る――のたとえどおり、土建業者の間では、もうずいぶん前からそういった「商売の仕方」の情報が全国の同業者の間で流れているのだ。「安くオトして（落札して）大木を切って儲ける」あるいはまだ切る必要のない「木を切る」という仕事を「ツクル」のである。タメにする仕事である。

長年にわたって、小学校の先生をしながら松前に桜を植え、子どもたちに桜を愛する気持ちを育ててきた浅利政俊先生。実生から100種類以上の桜の品種をつくったことでも有名である。新品種「紅豊」は今や全国に植えられている。各地から、さまざまな桜を集めて城内に桜見本園もつくった。七飯町の自宅の桜畑にて。郷土史家でもある

松前では、現在、「松前花の会」があり、その会を中心にして、それぞれの職場や、あるいは地域、小学生、中学生、婦人会、老人会に働きかけて、桜の保全に協力するグループがいくつもある。浅利先生の啓蒙を受けた子どもたちが大きくなって、またその子どもたちが参加している。

桜の寿命は人間の寿命よりはるかに長い。桜や木を大切にしていく気持ちや心を持った人間の、意志をつないでいかなければ、桜は美しくあり続けることはできない。特に自然交配や人間の手によって作られた「里桜」は寿命が比較的短かかったり、病虫害に弱いところがある。

こうした世代を超えて心を伝えていくことがどんなに大切なことかを、松前の桜は教えてくれるのである。お城に行けば、そういった町民みんなの心の籠もった美しい桜があるのだ。町全体が桜を愛する、桜を守る人たちなのだ。

拙著前作『桜旅』でも紹介したが、芭蕉が49歳のとき、故郷の伊賀の里、「予野の庄」に帰り、桜がきれいなのを見て一句詠んだ。「一里（ひとさと）はみな花守の子孫かや」（猿蓑）。予野の庄は平安中期、上東門院（藤原彰子）のころ「花垣の里」と呼ばれ、村の人みんなが「奈良の都の八重桜」のもとになる桜を守っていたのである。芭蕉は自分の故郷の人たちが、みんな花守であることを誇らしげに思って自慢したのである。今の松前町と一緒である。

松前の人たちは、多くの人が、「あなたたちは桜を愛する法統を受け継いだ人間ですよ」という「血脈」をもらっているに違いない。